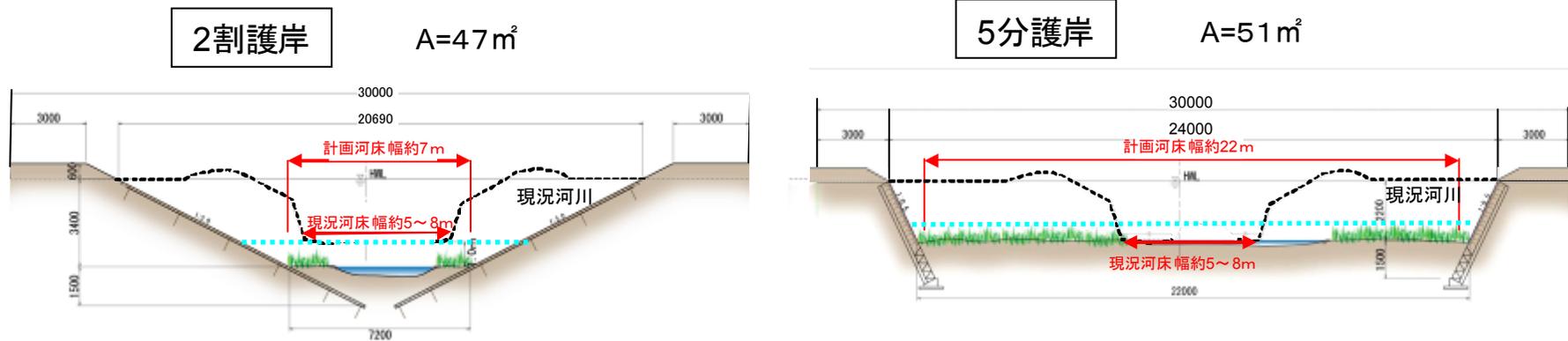
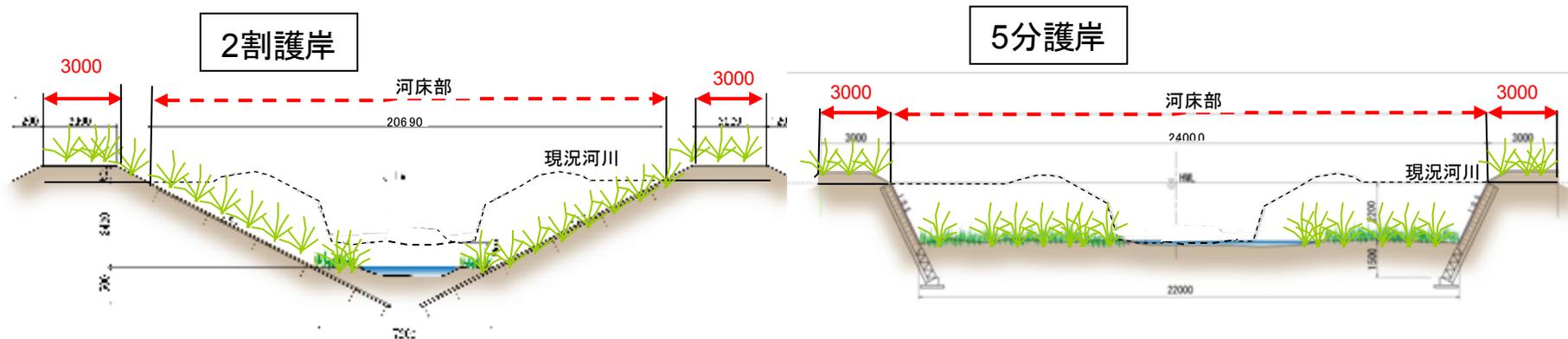


名月川合流点～唐木橋の各断面における河床の状況について



	見直し前	見直し後
平均年最大流量 (改修区間)	22.5m³/s	
護岸勾配	2割	5分
河床	河積確保のため、現況より約1m河床掘削を行う。	河床掘削を極力行わない。
河床幅	河床幅が狭いため、砂州が形成されない河床となる。	河床幅を拡幅することで、砂州が形成され瀬と淵が形成される。
年最大流量時の水深 (22.5m³/s)	約1.1m	約0.7m
川幅水深比 (B/HL>30→砂州形成)	B/HL=6.5<30 →砂州が出来ない	B/HL= 31.4>30→砂州が出来る
河川環境	河床が狭いため、砂州が形成されない河川環境となる。	河床が広く砂州が形成されるため、河川が有する自然の復元力により、多様な河川環境が出来る。

名月川合流点～唐木橋までの河川維持費について



	見直し前	見直し後
護岸勾配	2割	5分
草刈の範囲 (片岸)	堤防天端3.0m(管理用通路部)	堤防天端 3.0m(管理用通路)
年間維持費	維持費: $3.0\text{m} \times 2 \times 700\text{m} \times 80\text{円}/\text{m}^2 = \text{約}34\text{万円}$	維持費: $3\text{m} \times 2 \times 700\text{m} \times 80\text{円}/\text{m}^2 = \text{約}34\text{万円}$
河床内の土砂及び樹木については、状況にあわせて河川内の浚渫や伐採を行う。 類似河川の一庫・大路次川(5分勾配)では、約20年間河川内の浚渫や除草の実績はなく、 樹木の除去や土砂の浚渫を行うことはめったに無い。		

2割断面の評価

2割断面 改修直後

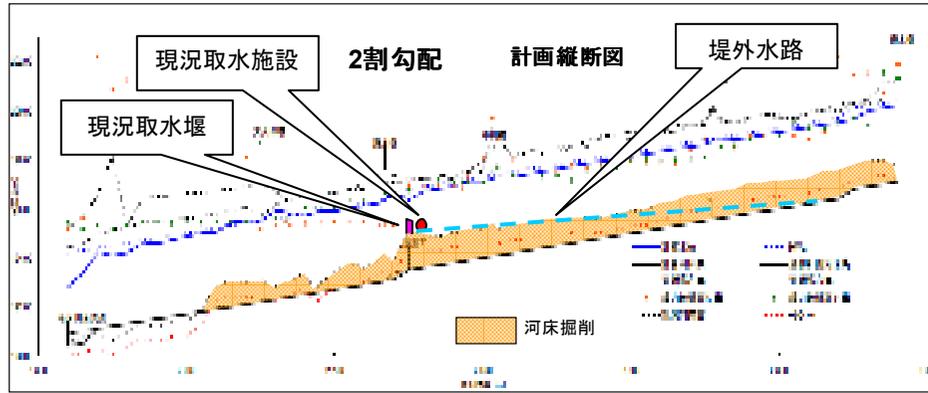
2割断面 改修3年後



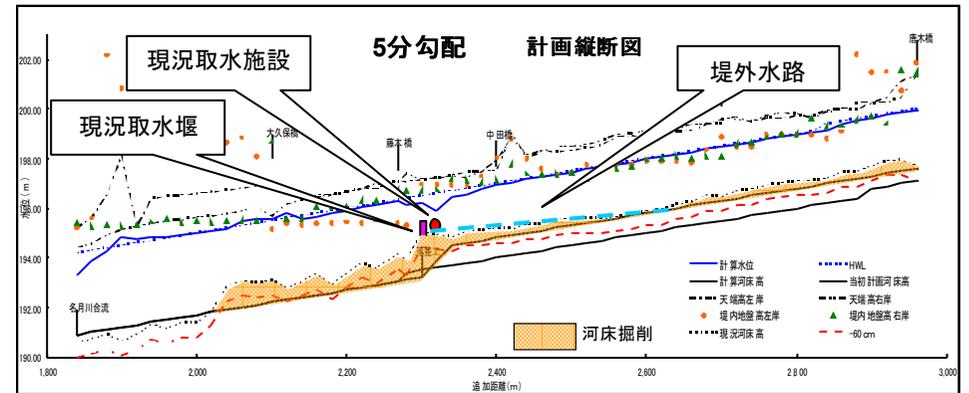
2割断面改修直後の状況と2割断面改修3年後の状況写真を比較すると、改修直後には一時的に植生が失われるが、3年経過すると周辺の自然環境も手伝って、植生は回復している。

名月川合流点～唐木橋間における各改修縦断に伴う取水施設について

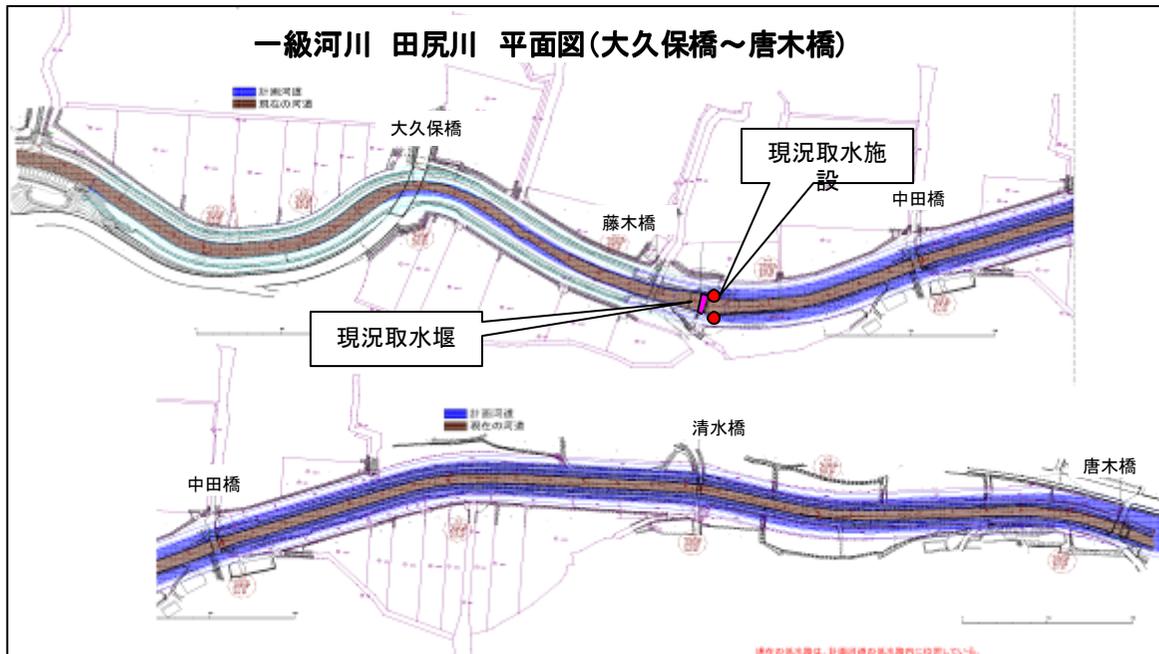
2割護岸



5分護岸



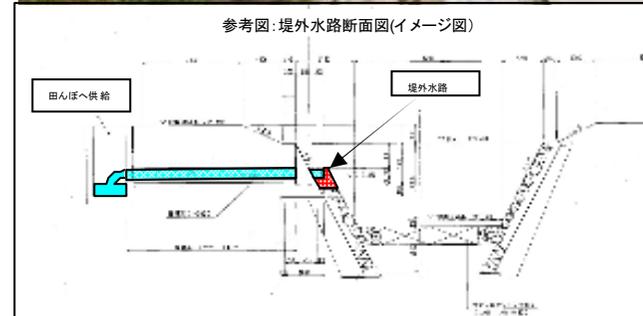
一級河川 田尻川 平面図(大久保橋～唐木橋)



堤外水路写真

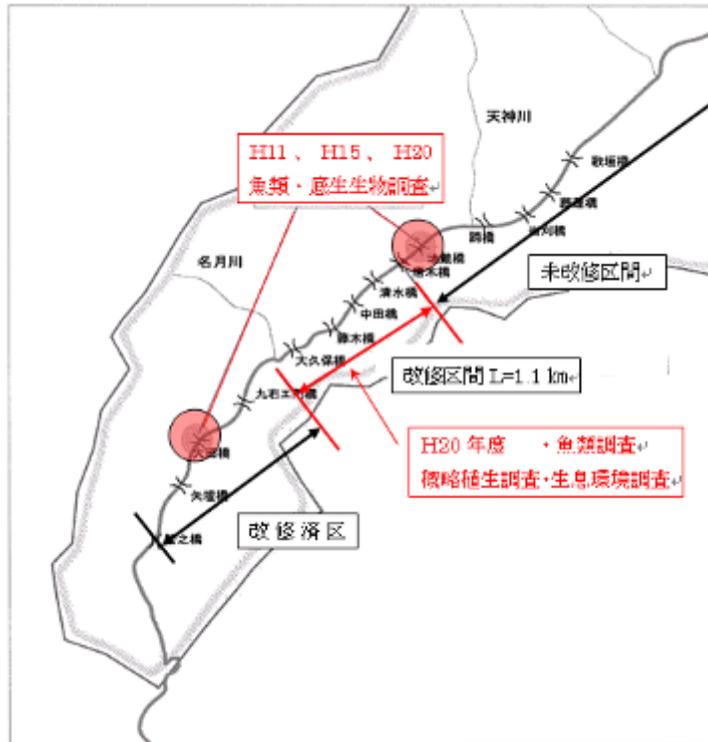


参考図: 堤外水路断面図(イメージ図)



一級河川 田尻川の環境モニタリング調査について

一級河川田尻川については、平成11年度(1999年)、平成15年度(2003年)及び平成20年度(2008年)に生態系調査が実施されている。その内容を整理すると以下に示すとおりである。



既往の環境調査	環境モニタリング調査(案)
<p>○平成11年度 (1999年11月、2000年1月実施)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・魚類調査 2箇所(太田橋、地藏橋) ・底生動物調査 2箇所(太田橋、地藏橋) <p>○平成15年度 (2003年11月実施)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・魚類調査 2箇所(太田橋、地藏橋) ・底生動物調査 2箇所(太田橋、地藏橋) <p>○平成20年度 (2008年10月実施)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・魚類調査 2箇所(太田橋、地藏橋) 名月川合流点～唐木橋区間 ・底生動物調査 2箇所(太田橋、地藏橋) ・概略植生調査 名月川合流点～唐木橋区間 ・生息環境調査 名月川合流点～唐木橋区間 <p>○調査結果の概要</p> <p>〔魚類〕 別紙のとおり4目6科14種の魚類が確認され、平成11年度以降、魚種の大きな変化はないものと考えられている。 なお、確認された魚種の中には、大阪府RDB(レッドデータブック)に記載されている重要種が6種確認されている。</p> <p>〔底生動物〕 調査回ごとの出現種類数は41～62種で、平成11年度以降大きな変化はないものと考えられている。 なお、確認された種の中には、環境省RDL(レッドデータブック)に記載されている種が1種、大阪府RDB(レッドデータブック)に記載されている重要種が4種確認されている。</p> <p>〔植物調査〕 平成20年の調査では、現況河床の植生帯の調査を行っている</p> <p>○考察 今回の調査で、改修済区間(太田橋(2割勾配))と未改修区間(地藏橋)での生物の状況は大きく異なることから、改修区間における魚類、底生動物等の生息状況は回復に向かっている。</p>	<p>○調査の目的 既存の調査結果をもとに実績を積み上げ、今後の多自然川づくりの目安になるようモニタリング調査を行う。</p> <p>○調査項目・調査地点(区間) 既存調査を踏まえて以下のとおりとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・魚類調査及び底生動物調査 <p>① 太田橋、地藏橋 ② 名月川合流点～唐木橋</p> <ul style="list-style-type: none"> ・植物調査(植生、植物相) ・生息環境調査(瀬・淵など) <p>① 名月川合流点～唐木橋</p> <p>○調査時期 別紙計画表のとおり実施する。</p> <p>〔工事実施区間〕 各年度の工事着手前に植物調査、生息環境調査等の調査を実施し、その結果に基づき対策を施し、環境に配慮した施工を行う。</p> <p>〔工事竣工後〕 改修完了後については、環境の回復状況について経年的に調査を実施する。 調査実施の間隔は、工事完了から1～2年間は連続して実施するものとし、その後はこの結果に基づき間隔を調整するものとする。</p> <p>○まとめ 田尻川において、多自然川づくりに基づく生息状況は現時点では実績がない。 今後、改修済区間(太田橋(2割勾配))についても継続的な調査を行う際に、改修区間(5分勾配)の改修においても環境面で回復傾向であるかモニタリング調査を行い検証していきたい。</p>

屈とう性落差工について

1. 屈とう性の定義

- ・河床になじみながら安定していくこと

2. 屈とう性構造の特徴(「河川管理施設等構造令」より)

- ・河床になじみながら安定していく構造。
(上下流の河床変動が大きいと予想される箇所では不適)
- ・構造上揚圧力が働かない。
- ・別個に水叩き及び護床工を設ける必要はない。
- ・流水が連続するよう留意する必要がある。

